

リンゴ

牧 幸 男

冬の長い信州は春が待ち遠しい。この気持ちを満足させてくれるのが、草花や樹木の斉の開花である。この中で、フィナーレを飾るのがリンゴの花が一番かもしれない。

子供の頃 私は林檎の花に興味なかった。学生時代に、歌声運動で歌った「カチューシャの歌」や、島崎藤村の「初恋」の詩に親しんでから、この花を見直すようになった。林檎が若葉の芽をだす頃、ピンク色に染まった蕾を少しずつ開く。最初は花弁のふちにピンク色を残しているが、開花が進むと白色に変わる。この変化を毎年確認し、自然の美しさに関心している。

林檎の原産地はアジア西部からヨーロッパ南東部付近と言われ、原点は北部コーカサス地方が有力視されている。原種植物は、カザフスタン東部、天山山脈の斜面の森林に自生するマルス・シエウェルシイ *M. alus sieversii* が野生林檎の木であったことが分かっている。この植物、栽培され始めるのは5千年前~1万年前らしく、徐々にシルクロード沿いに民族の移動とともに、ヨーロッパ各地に広がった。

我が国で林檎と呼んでいる品種は、古代中国から渡来した西アジア原産の品種で、直径2~3cmの実を沢山つけるタイプであった。これを我々は林檎（和林檎、地林檎）と呼んでいた。明治になりアメリカから導入された現在の林檎（西洋リンゴ）、即ち^{りんご}苹果とは、樹形・果実とも大きく異なっている。他に、わが国には野生林檎（^{りんき}林檎）も自生していたことから、大別すると3種のリンゴが生育している。

林檎の特徴は、他家受粉するが、種子から育ったリンゴは親に似ない性質であることが多い。このため、思わぬ高木になったり、味が甘かったり酸っぱかったりする。その後、接ぎ木の技術が開発されると、好ましい木から^{ほぎ}穂木を採り、台木に接ぐことで、素晴らしい林檎が生まれるようになった。現在は7,500種以上の品種が栽培されるようになり、亜寒帯、亜熱帯及び温帯で栽培可能となっている。

林檎は、果樹栽培歴史上もっとも古い樹である。スイスの湖婁民族の遺跡から炭化したリンゴの乾果が出土し、これがBC2,000年頃と推測がある。果実として人類と古い関係がある林檎は数々の伝説、民話、神話に登場している。

有名な物語は『旧約聖書』創世記の第3章の1節から7節に蛇にだまされ、3節「ただ園の中央にある木の実については、これを取って食べるな、これに触れるな、死んではいけないからと、神に言われました」と記述があるが、蛇にそそのかされイブは食べ夫にも食べさせた。この結果、禁断の木の実を食べた二人が羞恥心を知り、エデンの楽園から神に追放された記述がある。この記述の最大の目的は、自分の罪を他人のせいにした事（蛇）ではないだろうか。

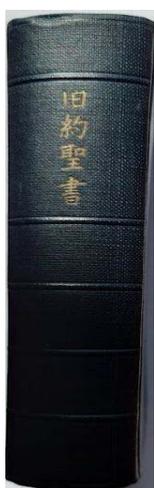
『旧約聖書』は、BC4~BC5頃成立したと言われているので、林檎が記述されていても不思議でない。しかし、当時林檎はこの地域では栽培されていない説もあり、この果実が何か、様々な想像されている。そのため国や地域により、イチジク、ブドウ、ナツメヤシ、エトログ等のいずれかだろうと想像されている。

しかし、長い歴史の中で、禁断の果実を林檎とする解釈が主流となったようである。様々な説があるが、ひとつの説に、382年当時のローマ教皇ダマススⅠ世 *Damasus I* が旧約聖書をヘブライ語からラテン語に翻訳するようヒエロニムス *Hieronymus* に命じた。彼は405年に翻訳を完成。

この翻訳に関しスウェーデン・ウプサラ大学英文学科のロバート・アッペルバウム *Robert Appelbaum* 名誉教授は「当時の学者は旧約聖書を翻訳する上で、ヘブライ語の「פֶּרִי」をラテン語の「malum(malus)」とした。malumは「悪」という意味に加えて、「真ん中に種と芯があり、その周りに果肉がある果物」を意味する言葉で、具体的に「リンゴ」と翻訳されたのかもしれないと述べている。このラテン語の聖書を以来、「malum」が「リンゴ」と解釈されるようになり、禁断の果実はリンゴの形で描かれるようになった。



林檎の花



旧約聖書
(1955年版)

次に、ジョン・ミルトン John Milton (1608~1674) 著の叙事詩『失楽園』(1667) の記述に、禁断の果実を指した言葉として「林檎」の明記がある。この失楽園は聖書の正典ではなく、いわば創世記を基にした二次創作的作品であるが、出版以降「禁断の果実(林檎)」説が世界中に広まったと言われている。

余談であるが、イブが果肉の部分を食べ、芯をアダムに食べさせたら、芯を喉につかえてしまった。この事実から、のど仏を Adam's Apple と呼び、イブは丸い部分を食べたので、胸元まで下がって2個の乳房になった物語もある。

宗教と林檎の関係の他に、政治ではウイリアム・テル William Tell の物語、科学ではアイザック・ニュートン Sir Isaac Newton の引力の法則、宗教画が一辺倒の時代に林檎を描き芸術の位置に高めたポール・セザンヌ Paul Cézanne 等、林檎と私達の生活は縁が深い。

林檎は、バラ科の落葉高木(放任されると8mにもなる事がある。)である。樹皮は灰色でほぼ滑らかであるが、老木は不規則に剥かれる、一年枝は暗紅紫色で毛が密生し、2年枝は短枝もよくでる。小枝は白い皮目が目立つ。花期は4~5月白または薄紅の花が咲く。品種に寄るが、7~11月にかけて果実が実り、収穫される。

我国には平安時代(794~1192)に記述がみられる。しかし、林檎が栽培され、一般に知られ始めるのは、江戸時代以降とされている。文久年間(1861~1864年)、アメリカから渡来した説と明治初年に北海道函館に入ったドイツ人 R・ゲルトナー Karl Friedrich von



果樹園の林檎

Gärtner がもたらしたという説がある。その他に、日本へ最初に持ち込まれたのは中国からの説がある。培されている西洋リンゴの品種は、そのほとんどが明治初期にアメリカから持ち込まれたものがルーツとなっている。日本国内の主な林檎産地の多くは政府指導によっており、生産がようやく軌道に乗ったのは明治20年代とされている。各地域の栽培歴史は割愛する。

現在世界中で生産され、栄養価の高い果実は生食される他、様々な加工品として利用されている。また、西洋美術、特に絵画ではモチーフとして昔からよく扱われてきた。生産量を国別で見ると2021年の生産量(国連のFAOSTAT)の値(単位:1,000 t)は、中国の45.9、トルコ4.5、USA4.4等で日本は0.73である。ちなみに国内では青森県が全体の60%、長野県は18%、岩手県が6%と3県で全体の80%を占めている。しかし、林檎の加工は欧米では進んでいるが、日本ではまだ生食利用が多い。

我国で、林檎が詩歌の対象になるのは、明治になり、林檎が知られるようになったからである。

石狩の 都の外の 君が家 林檎の花の 散りてやあらむ 石川啄木
人恋し 林檎の花を 見て立てば 富安風生

植物名は、漢名の林檎の音読みによる。漢名の意味は「多くの禽(小鳥)がその林に集まる」に由来する。別名は、林檎(在来種)、苹果(西洋林檎)、平果、陵果、頻果、蘋果、文次郎等がある。いずれも実の姿から名付けられている。文次郎の名は、この木が黄河を流下してきた木を、この名の人か拾い上げ植えたことによる。

学名は和名林檎(ジリンゴ)が *Malus asiatica*、姫林檎(イヌリンゴ)が *M. prunifolia*、林檎(セイヨウリンゴ)は *M. domestica* で、属名はギリシア名の転化で、種小名の *asiatica* はアジア産を示し、*prunifolia* はサクラに似た葉の植物、*domestica* はその土地産の意で、原産地がアジアで桜に似た葉を持つ植物と考えてよい。

薬用は、林檎と人類の関係が続くのは、薬効があるからだ。英国の諺に "An apple a day keeps the doctor away." 「一日一個の林檎は医者を選ばせる。」、Eat an apple on going to bed, and you'll keep the doctor from earning his bread. 「寝る前に林檎を食べれば、医者を選ばせてやれる。」等「万病の妙薬」と考えている理由かもしれない。わが国でも「リュウマチ、皮膚病、慢性の胃腸病、むくみに効能あり」と伝えられ、今日でも、去痰、気管支炎、風邪などに使われている。

食用は、生食より加工する機会が多いが、有名な製品は Cider apple であろう。発酵させると、糖分はアルコールと炭酸ガスに変わる。アルコールはせいぜい8%である。フランスには「小さな実からうまい林檎酒」と言う俗言がある。特に、ノルマンディー地方の Cider apple は有名で、味が良く、私も味わった。その他、焼いたり、煮たり、アップルパイ等さまざまに加工して利用している。

花言葉は、「選ばれた恋」、「名声」、「誘惑」である。



フジ(無袋)

